

藻場・干潟

●藻場のはたらき ●干潟のはたらき ●藻場・干潟の保全にむけて



水産庁 漁場資源課
〒100-8907 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1
電話 03-3502-8111
内線 7374

(パンフレット作成受託者)
社団法人 日本水産資源保護協会

平成14年3月発行

(写真等の一部は徳島県水産研究所、国土環境(株)の提供です)

R100
官製配布率100%再生紙を使用しています

2002.3発行



水産庁



藻場のはたらき

藻場は、比較的大型の海藻が群落を形成して生い茂っている場所をいいます。藻場の呼び名は、藻場を構成する種類によって様々です。また、コンブやアラメ・カジメなどが茂っているところを「海中林」と呼ぶこともあります。

藻場は、私たちに食用となる海藻を供給してくれるはたらきの他に、魚などの産卵場、幼稚魚の保育場、餌料の供給や水質の浄化などのはたらきがあり、水産資源を保護培養する上で大切な役割をこなっています。



※花をつける海生植物（顕花植物）を「海草」、花をつけない海生植物（陰花植物）を「海藻」といい、海藻は葉の色で緑藻、褐藻、紅藻に分けられます。海草の代表がアマモで砂泥域に繁茂し、この海草からなる藻場を「アマモ場」といいます。藻場を形成する代表的な海藻にホンダワラ類、コンブ類やアラメ・カジメ類などがあり、潮下帯の水深2～3mから20mほどの岩礁域に分布します。コンブ類やアラメ・カジメ類の藻場を「コンブ場」、「アラメ・カジメ場」といいますが、ホンダワラ類では「ガラモ場」といいます。

食品生産の場としてのはたらき

藻場を構成する海藻自身が海産物として利用の対象になっています。コンブ類、ワカメ類やテングサ類などです。他に、ホンダワラ類に付着して生育するモスク、エゴノリなども食品として利用されています。



コンブの群落

餌料供給の場としてのはたらき

海草や海藻の表面には、付着珪藻や小型の葉上動物のヨコエビ、ワレカラやアミ類などの甲殻類や小型の貝類、ゴカイなどの多毛類が生息し、魚介類の優れた餌となります。

また、コンブやアラメ・カジメなどは、直接アワビ、サザエやウニなどの餌になります。このように藻場には直接、間接に良好な餌料を供給してくれるはたらきがあり、水産資源の維持・再生や育成に重要な役割をはたしています。



海草に付着した微小生物

産卵場や幼稚魚の生育場としてのはたらき

藻場に住む魚などには、幼稚魚期だけを過ごす種類、終生そこで生活する種類、不定期に利用する種類などさまざまです。また、ホンダワラ類（ガラモ場）には、トビウオやサヨリなどが卵を産みつけ産卵場としての役割をはたしています。



アマモに産み着けられたアオリイカの卵

藻場は、波や潮汐による海水の流れを緩和するため、遊泳力の弱い幼稚魚にとって格好の生活の場を与えます。また、外敵から身を守る隠れ家にもなり、いわゆる保育場（ナーサリーランド）として大切な役割をこなしています。



ガラモ場付近で遊泳する幼稚魚

環境保全の場としてのはたらき

海草や海藻は、海水中に溶けている窒素やリンを吸収するとともに、酸素を供給するため、藻場は水質を浄化してくれ、漁場環境の維持・保全にも役立っています。

その他のはたらき

流れ藻はホンダワラ類などの海藻が、波浪などのためにちぎれ、沖合に流れ出たものです。海面を漂う流れ藻の『陰』にブリ、メバル、カワハギなどの幼稚魚やガザミなどの甲殻類が着生し、生育場所として利用しています。また、サンマなどの卵が産み着けられることもあります。

特に、ブリ養殖の種苗であるモジャコ稚魚は流れ藻で採捕されます。



流れ藻の下で遊泳する幼稚魚



流れ藻



採集された幼稚魚



干潟のはたらき

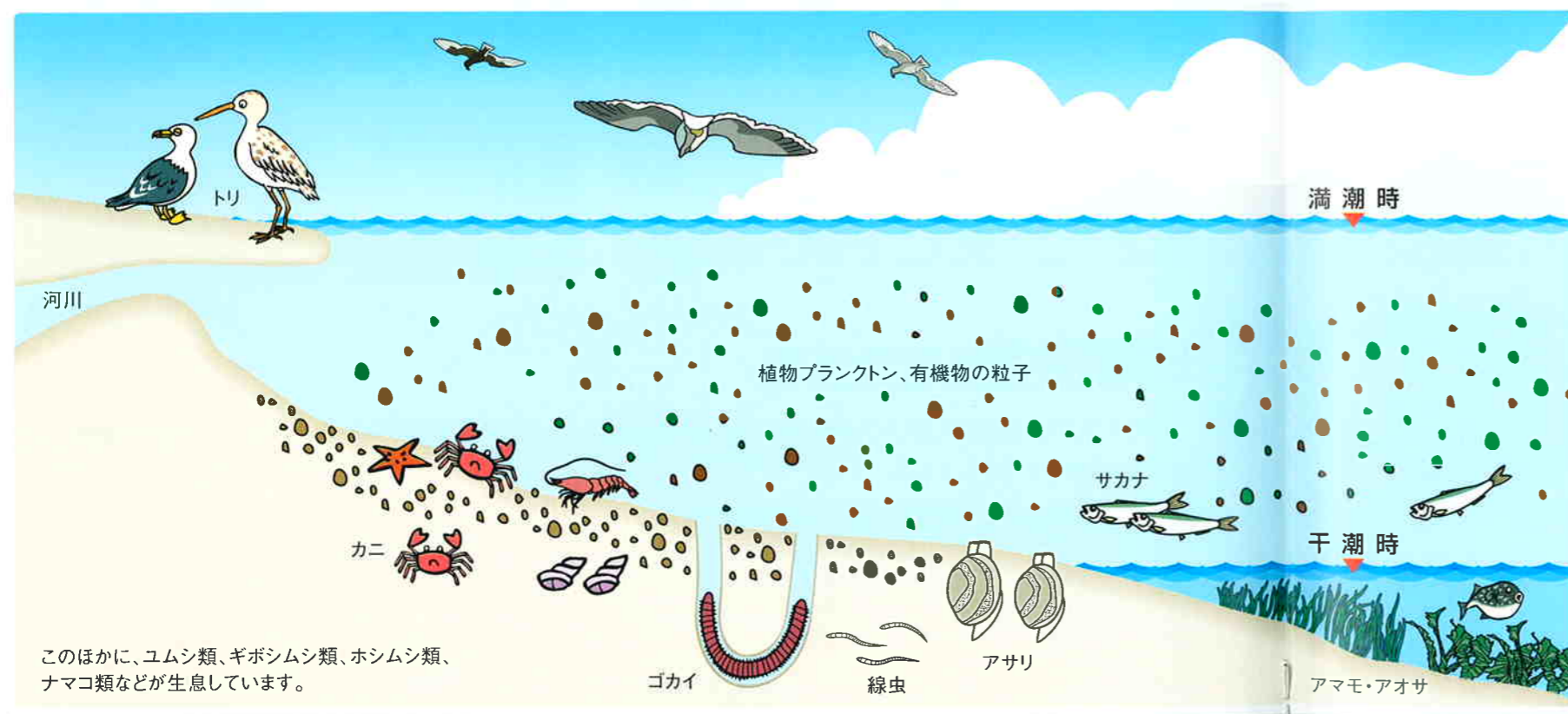
干潟とは干潮の時に干上がり、満潮の時に海面下に没する潮間帯において砂質又は砂泥質の浅場が広がっているところです。

潮位の差が小さい日本海や北海道ではあまり発達せず、我が国の干潟の90パーセント以上が千葉県以南の本州太平洋岸、四国、九州に存在します。



海水を浄化するはたらき

干潟の砂泥の中にはバクテリア、線虫、ゴカイ、アサリ等の底生生物が棲み、これらの生物は干潟に流れ込む有機物に富んだ粒子や豊富な栄養塩を吸収して増殖する植物プランクトンを餌として利用します。その結果、有機物は分解され、栄養塩は除去されて海水が浄化されます。



渡り鳥の飛来地としてのはたらき

干潟はカニ類やゴカイ類などさまざまな生物が多数生息するため、シギ・チドリ類などの渡り鳥にとって重要な餌場、休息地、越冬地となります。我が国の干潟としては千葉県の谷津干潟と沖縄県の漫湖がラムサール条約(正式名「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」)に登録されています。



オオソリハシシギ



ズグロカモメ

希少生物の生息地としての重要性

また、水鳥以外にも、ムツゴロウ、アリアケヒメシラウオ、シオマネキなどの貴重な野生生物の生息地としても重要です。



シオマネキ



トビハゼ

漁場としての役割

干潟や干潟と隣接する浅海域は窒素、りん等の栄養塩が豊富でノリの養殖場として好適です。また、アサリ、バカガイ、トリガイ、クルマエビ、カニ類、魚類等の漁場としても重要な海域です。更に、魚類、クルマエビ等の幼稚子の生育の場としても重要です。



ノリ養殖場



アサリ

人と海のふれあいの場としての役割

潮干狩り、野鳥の観察などレクリエーションの場として、また、子供達の環境教育、情操教育の場としても重要です。



藻場・干潟の保全にむけて

藻場・干潟には様々な機能があり、私たちの生活に重要な役割を果たしていることが、ご理解いただけたことと思います。

一方、人間の活動が拡大するにつれて、様々な問題が生じており、その解決が急がれています。さらに、「持続可能な開発」、「恵み豊かな環境の次世代への継承」、あるいは「湿地の賢明な利用」などに積極的に取り組むことが、大きな課題となっています。

藻場・干潟の現状

環境庁が実施した第4回自然環境保全基礎調査によれば、1992年現在の藻場・干潟の面積はそれぞれ、201,154ha、51,462haで、1978年に実施された調査以降に消滅したと判断される面積はそれぞれ、6,403ha、4,076haでした。

藻場が消滅する主な理由は、埋立等の直接改変、磯焼けなどがありますが、4割以上は理由がはっきりしていません。一方、干潟は埋立および陥没により7割以上が失われています。

■天然藻場・人工藻場の分布

- 天然藻場の場所
- 藻場造成の場所



■天然干潟・人工干潟の分布

- 天然干潟の場所
- 人工干潟の場所

(注：図中の●印は位置を現すもので、規模の大小を現すものではありません)
(資料：「日本の干潟・藻場・サンゴ礁の現状」、「湾内における干潟との共生マニュアル」)

取り組み

藻場・干潟の保全にむけて、富栄養化防止策、濁り防止策、藻場造成、干潟造成など、様々な取り組みが行われています。

■人工干潟の造成

干潟にしようとするところに、きれいな砂をしきます(覆砂)。入れた砂が、崩れて流れ出すのを防ぐために、沖合いの海底に潜堤を作ることもあります。覆砂により汚れなどがたまった海底からの栄養塩の溶出が削減されるとともに、干潟による酸素供給等により環境の浄化が期待されます。



■藻場の造成(海藻の場合)

ブロックなどの面に海藻をはやして、海中に移植します。



■藻場の造成(海草の場合)

アマモは砂の中に張った根から掘り起こして、新たに藻場を造成しようとするところに、移植されます。

